

# ゲルマン諸言語の対応語間に見られる 無声摩擦音と有声摩擦音の対立について —ゴート語と他の言語との比較において—

(2)<sup>29)</sup>

下 寄 正 利

## 2. 名詞類

名詞類における無声摩擦音と有声摩擦音の対立の原因としてまず第一に考えられるのが、Vernerの法則であろう。実際、Vernerの法則以外には音の対立を生じている原因は考えられないようなケースから、Vernerの法則により音の対立が生じている可能性も完全には否定できないといった程度のケースまで、語により蓋然性に差はあるにせよ、ほとんどの語についてVernerの法則が音の対立の原因である可能性が考えられる。ではなぜ言語によってVernerの法則の作用を受けた形とそうでない形が生じてくるのかについては、いくつかのケースが考えられる。

アクセントが第1音節に固定される前には、ゲルマン祖語にもインド・ヨーロッパ祖語と同様に、語形変化の際アクセントの位置の移動する語が存在していたものと考えられる。このアクセントの移動は、語形変化系列内での文法的交替を生じることになるが、この文法的交替はアクセントの位置が固定した後、平均化されていく。その際、言語により平均化の仕方に違いがあると対応語間で無声摩擦音と有声摩擦音の対立を生じることになる。これが第1のケースである。

また、アクセントは移動せず一箇所に固定されていても、言語によりアクセントが語根にあるのか接尾辞にあるのか語尾にあるのか、語根及び接尾辞が多音節の場合は更にその内のどの音節にあるのか異なっていると、やはり言語間で文法的交替を生じることになる。これが2番目に考えられるケースである。

この二つのケースについては、それらに該当する可能性の有る語の内、どの語がどちらの理由で音の対立を生じているのか特定するのはほとんど不可能である<sup>30)</sup>。よって本稿ではこれらの二つのケースを一つにまとめ、以下Verner

の法則(1)とすることにする。

無声摩擦音を示す語と有声摩擦音を示す語の間には、時として属する形態論上の下位クラスの相違や接尾辞の有無あるいは相違といった語幹の形成法の違いが見られることがある<sup>31)</sup>。この場合は、この語幹の形成法の違いがアクセントの位置の違いを生じ、音の対立を生んでいるものと考えられる。以下このケースを Verner の法則(2)とする。もっとも、本稿では原則として語幹の形成法が同じ語しか扱っておらず、Verner の法則(2)が問題となってくる語は、元は同じ語形であったものが、その後別々の発展を遂げ、異なった形態となったと考えられる語もしくはそういう説のある語と、形態論上での下位クラスに属すのか不明で、そのためはっきりと語幹の形成法が異なっていると断言できない語に限られる。

無声摩擦音を伴った独立語が複合語の第2成分として用いられると<sup>32)</sup>、その無声摩擦音が有声摩擦音になることがあるが、これはアクセントが第1成分に置かれたことによりその子音の直前の音節がアクセントの無い音節となってしまう、Verner の法則が働いたものと考えられる<sup>33)</sup>。このケースを Verner の法則(3)とする。このケースは、おそらく主として独立語への類推により文法的交替が排除されたためであろうが<sup>34)</sup>、非常にまれである<sup>35)</sup>。

複合語についてはまた、独立語として用いられることのない第2成分が無声摩擦音と有声摩擦音の対立を示すことがある。これは常に Verner の法則(1)による可能性もあるが、それと並んで、有声摩擦音が現れるのは、上の Verner の法則(3)のようなケースがあることからして、アクセントが第1成分の方に置かれているためである可能性も考えられる。しかしその際問題になってくるのが、無声摩擦音を伴った形がなぜ存在しているのかということである。類縁語への類推といったことが考えられる例もあるが、すべての例がそれで説明できるわけではない。これについては、複数の理由が考えられ、そしてそれらの内の一つに絞り込むこともできないが、言語によりアクセントが第1成分に置かれるか第2成分に置かれるか異なっていたためか、同一言語の第2成分を同じくする複合語同士であっても複合語によりアクセントの位置が異なり文法的交替が見られたものが後に平均化され、その際言語によりその仕方に差異が生じ、言語間に文法的交替が見られるようになったためか、あるいは第2成分が主アクセントを持たない場合もアクセントを完全に失ってしまうわけではなく、そのため Verner の法則による音変化が阻害されることがあったためかのいずれかの理由によるのではないかと推測される。また独立語として用いられるこ

とのない第2成分の示す無声摩擦音と有声摩擦音の対立についてこのようなことが仮定できるとすると、独立語として用いられることのない第1成分の示す音の対立についても同じことが仮定できよう。このケースを以下 Verner の法則(4)とすることにする。

名詞類における無声摩擦音と有声摩擦音の対立への Verner の法則の関わり方としては、これ以外のケースも全く考えられないわけではないが、ほぼ以上のようにまとめることができよう。これを基に、以下においてそれぞれの語における音の対立がこれらの内のどのケースに該当するのか、また Verner の法則と並んでそのほかにも音の対立の原因が考えられる場合、あるいは音の対立が Verner の法則以外の原因によると考えられる場合、それはどのようなものか考察していくことにする。

なお、ゴート語の語形が形態論上での下位クラスに属するかはっきりしないことがあるが、その場合は他の言語の語形に従って分類を行っている。

## 2.1. 名詞

### 2.1.1. a-語幹<sup>36)</sup>

ans

s …… aisl. áss, (mhd. ansboum)

z …… got. ans (a- oder i-Stamm)

got. ans は単数与格 anza という形で2回文献に出てくるだけで、a-語幹か i-語幹か不明である。s と z の対立は、got. ans が a-語幹だとしたら Verner の法則(1)によるものと考えられるが、i-語幹だとしたら Verner の法則(2)による可能性もある。

auhns

χ …… got. auhns (a- oder i-Stamm)

γ …… aschwed. oghn, anorw. ogn

got. auhns も単数対格の例が1例あるのみなので、a-語幹か i-語幹か分からない。もし a-語幹だとしたら Verner の法則(1)により、もし i-語幹だとしたら Verner の法則(2)により χ と γ の対立が生じているものと考えられる<sup>37)</sup>。

bloþ

þ …… got. bloþ

ð …… ae. blōd, as. blōd, ahd. bluot

þ と ǰ の対立は、Verner の法則(1)によるものと考えられる。

dius

z …… got. dius, aisl. dýr, ae. dēor, as. dior, ahd. tior, adän.

diūr, aschwed. diūr

古デンマーク語と古スウェーデン語ではR-ウムラウトが現れないが、これは adän. diūr と aschwed. diūr が s を持つ語形と z を持つ語形の混淆によって生じた形であるためと説明できよう<sup>39)</sup>。dius はどの言語も z を示しているが、adän. diūr と aschwed. diūr という語形を説明するためには、s を持つ語形の存在を背後に仮定しなければならないと言える。この s と z の対立は Verner の法則(1)によるものと考えられる。

(ga-)fāh

χ …… got. gafāh, mhd. umbevāch (a- oder i-Stamm)

γ …… ahd. fang (a- oder i-Stamm), (aisl. fengr (i-Stamm), ae. feng (a-Stamm < i-Stamm))

mhd. umbevāch と ahd. fang は a-語幹なのか i-語幹なのか不明である。χ と γ の対立の原因としては、Verner の法則(1)と並んで Verner の法則(2)が考えられよう。また got. gafāh については got. fāhan への類推が関与している可能性もある。mhd. umbevāch と ahd. fang がもし同一の下位クラスに属するとすると、Verner の法則(1)により同一言語内で音の対立が生じていることになる。Verner の法則(1)による同一言語内での無声摩擦音と有声摩擦音の対立はこの後に見ていく語の中にも見られるが、これは、同一言語内にアクセントの位置の異なる別形が並存していたのが両方とも残ったためか、文法的交替の平均化の際、普通は無声摩擦音か有声摩擦音かのどちらかに統一されるのが両方の形を生じてしまったためと考えられる。

gub

ゴート語の短縮表記  $\overline{g\text{ps}}$ ,  $\overline{g\text{pa}}$  は、どう読むべきか見解が分かれているが<sup>40)</sup>、もし gudis, guda と読むのだとしたら、ゴート語内部においても、他の言語との間においても、無声摩擦音対有声摩擦音という対立は生じてこない。しかしもし gupis, gupa と読むのだとしたら、語形変化系列内(nom., akk. pl. guda)、派生語や複合語との間 (afgups, afgudei, gudisks, gudja, gudafaurhts, gudalaus usw.)、及び他の言語の対応語との間で (ae. god, as. god, ahd. got) þ と ǰ が対立していることになる<sup>40)</sup>。この対立は Verner の法則(1)によるものと考えられよう。

(faur(a)-)hāh

χ …… got. faur(a)hāh, ahd. bruohhāh (a- oder i-Stamm)

γ …… ahd. hang (a- oder i-Stamm)

ahd. bruohhāh と ahd. hang は a-語幹か i-語幹かはっきりしない。よって χ と γ の対立の原因としては、Verner の法則(1) と Verner の法則(2) の両方の可能性が考えられる。また got. faur(a)hāh については、got. hāhan への類推が関与している可能性もある。

kas

s …… got. kas

z …… aisl. ker, as. (bī-)kar, ahd. kar, aschwed. kar<sup>41)</sup>

s と z の対立は Verner の法則(1) によるものと考えられる。

\*liuþ

þ …… got. liuþareis, liuþon, ae. lēoþ, as. lioth, ahd. liod

ð …… got. awiliuþ

ゴート語では \*liuþ そのものは伝わっていないが、派生語の liuþareis<sup>42)</sup>、liuþon や複合語の awiliuþ が伝わっている。派生語の liuþareis と liuþon では、他の言語と同様 þ が現れているが、awiliuþ のみは ð となっている。ゴート語において -areis による派生語や名詞派生の弱変化第2類の動詞が元の名詞との間で文法的交替を示すことは無く<sup>43)</sup>、また他の言語の対応語との子音の共通性からしても got. \*liuþ は \*liuða- ではなく \*liuþa- であると考えられ、そうすると got. awiliuþ における ð は、Verner の法則(3) によるものと見てよからう<sup>44)</sup>。

munþs

þ …… got. munþs (a- oder i-Stamm)<sup>45)</sup>, aisl. munnr, muþr, ae. mūþ, as. mūth, afries. mūth, ahd. mund

ð …… afries. mund, as. mund

þ と ð の対立は Verner の法則(1) によるものと考えられる。古フリジア語と古ザクセン語では、þ を持つ mūth と ð を持つ mund の両方が生じる結果となっている。

raus

s …… got. raus

z …… aisl. reyrr, mnd. rōr, mndl. roer, ahd. rōr

s と z の対立は、Verner の法則(1) によって生じているものと考えられる。

tagr

χ …… aisl. tár, ae. tēar

γ …… got. tagr, ae. teagor

tagr の場合も、χ と γ の対立は Verner の法則 (1) によるものと考えられる。古英語では、χ を持つ形に由来する tēar と、γ を持つ形に由来する teagor が並存している。

peihs

χ …… got. peihs

γ …… aisl. þing, ae. þing, as. thing, ahd. ding

χ を持つ語形と γ を持つ語形を比べてみると、前者は -s- を持つのに後者にはそれが無いという違いが見られ、したがって χ と γ の対立は Verner の法則 (2) によると考えられる。また got. peihs と γ を持つ他の言語の語形の間には意味的な違いも見られ<sup>46)</sup>、両者は別個の語として扱った方がよいように思われる。χ を持つ形と γ を持つ形はそれぞれ germ. \*þénχaz (< idg. \*ténkos) 及び germ. \*þenyás (< idg. \*tenkós) というアクセントの位置のみを異にした同一の語形に遡ると説明されることがあるが<sup>47)</sup>、s を持つ got. peihs の方についてならまだしも<sup>48)</sup>、aisl. þing, ae. þing, as. thing, ahd. ding の方は、どれもその語形変化系列内に idg. \*-es- / -os の痕跡が全く見られない。γ を持つ語形が germ. \*þenyás に遡るという考え方はそもそも got. peihs との関連性から出てきたものに過ぎず、それ以外の根拠は何も無い。したがって、やはり got. peihs は確かに同一の語根を持つてはいるが、γ を持つ他の言語の語とは語幹の形成法、アクセントの位置、意味の異なった別の語とみなした方がよからう。

witop

þ …… ahd. wizzōd

ð …… got. witop, ae. witod

witop は動詞の過去分詞に由来すると説明されることがある<sup>49)</sup>。確かに ae. witod については -witian という弱変化第 2 類の動詞があり、その過去分詞であると考えられるものの、got. witop と ahd. wizzōd については got. \*witon, ahd. \*wizzōn という動詞は実証されていない。もし仮に got. \*witon, ahd. \*wizzōn は存在していたと仮定した場合、got. \*witop については過去分詞の名詞化したものと説明できるが、問題なのは ahd. \*wizzōn である。すなわち弱変化動詞の過去分詞は常に ð を示し þ を示すことは無いのに、この ahd.

wizzōd は d < θ を示しているのである<sup>50)</sup>。ahd. wizzōd がそれでも過去分詞に由来するのだとしたら、唯一考えられることは、-ōt < \*-ōθa- と -ōd / t < \*-ōp / θu-<sup>51)</sup> が混同されたため、t が d に変化したのではないかということである。実際、ahd. wizzōd は got. witop と同様中性名詞として用いられることもあれば、-ōd / t < \*-ōp / θu- (got. -op / dus) を持つ語のように男性名詞として用いられることもあるので、その可能性は非常に高いように思われる。また一方、ahd. wizzōd または got. witop と ahd. wizzōd の両方が過去分詞に由来するのではないとしたら、p と θ の対立の原因として Verner の法則(1)が考えられよう。しかしながら、この場合もそれと並んで -ōd / t < \*-ōp / θu- との混同により古高ドイツ語で d < p が現れているのではないかと考えられ、またむしろその可能性の方が高いように思われる。

### 2.1.2. ja-語幹

awepi

p …… got. awepi

θ …… ae. ēow(e)de, ahd. ouwiti

W. Meid は got. awepi, ae. ēow(e)de, ahd. ouwiti は集合名詞を形成する接尾辞 \*-īp / θja- による造語としているが<sup>52)</sup>、got. awepi では不可解なことに第2音節の母音が e になっている。ゴート語では ei が e と綴られることが時折あるので、awepi についても \*awepi が本来の形であると説明されることがある<sup>53)</sup>。もしそうだとすると、ゴート語と古英語、古高ドイツ語の間には母音の長短の違いがあることになるが<sup>54)</sup>、i と ī の違いがなぜ生じているのかについても、短い i (古英語では e に変化し、更に脱落) は長い ī の弱化したものにはすぎないのか、それともこれはアプラウトによるものなのか (i: eī)、あるいは何か更に別の理由によるものなのか不明である<sup>55)</sup>。このように母音の長短の問題があるにせよ、ゴート語の本来の語形を \*awepi とすることでこの語を \*-īp / θja- という接尾辞と結びつけることができるようになるわけだが、ゴート語の e が本当に ei の書き間違いなのかどうかは簡単には断言できないように思われる。ゴート語の文献に awepi は3例出てくるが、その3例すべてが ei ではなく e という綴りを示しており、これは単なる偶然と考えてよいものなのか疑問が残る。もし awepi が本来の形だとすると、got. awepi がそもそも \*-īp / θja- による派生語なのかどうかも問題になってこよう<sup>56)</sup>。

このように got. awepi という語形についてははっきりしたことはよく分か

らないわけだが、pとθの対立についても got. aweþi という語形をどう解釈するかにより考えられうる原因が変わってくる。すなわち、もし got. aweþi と ae. ēow(e)de, ahd. ouwiti との間に語幹の形態の相違が無いとするならば、Verner の法則(1)による可能性が考えられるであろうし、もし接尾辞アブラウトその他により語幹の形態に違いがあるのだとしたら Verner の法則(2)の可能性が考えられよう。

また aweþi における p と θ の対立については、Verner の法則のほかに Thurneysen の法則によるものである可能性も考えられよう<sup>57)</sup>。Thurneysen の法則については、その音法則としての存在自体がまず研究者の見解の分かれるところであるが、もしそうした音法則が存在していたと仮定しても、どのような環境で適用されたか、接尾辞においてだけなのか、それともアクセントの無い母音の後にある語中の摩擦音すべてに対してなのかははっきりせず、また例外も多く、そうした例外は必ずしも類推で説明がつくものばかりではないなど問題点が多い。しかし音変化の起こる環境もはっきりせず、一つの音法則と呼べるようなものだったかどうかとも分からないとしても、アクセントの無い母音を挟んだ語中の子音間で異化現象が起こることがあったことは確かであろう。aweþi についても、w と θ の間で異化が起こり、θ が p へ変化したということは、考えられうることであろう。

fulhsni

χ …… got. fulhsni, aisl. fylxni, fylsni

γ …… aisl. fylgsni

古アイスランド語では χ を伴った形と γ を伴った形の両方が見られる。χ と γ の対立は Verner の法則(1)によるものか、あるいは古アイスランドにおいて aisl. folginn への類推から fylgsni という語形が生じたためかのいずれかの理由によるものと考えられる<sup>58)</sup>。

(weina-)basi

s …… got. weinabasi, ndl. bes

z …… aisl. ber, as. beri (ja-Stamm und i-Stamm), ahd. beri

s と z の対立は Verner の法則(1)によるとも考えられるが、それと並んで、この語は複合語の第2成分として用いられることが多く、その際 Verner の法則(3)により s が有声音化し、独立語との間で文法的交替を生じたが、後にそれぞれの言語において s か z かのどちらかに統一されたためである可能性も考えられうる<sup>59)</sup>。



### 2.1.3. $\bar{o}$ -語幹

ahana

$\chi$  …… got. ahana

$\gamma$  …… aisl.  $\varrho$ gn, ae. e genu, mnd. agen, mndl. age, ahd. agana  
(n- oder  $\bar{o}$ -Stamm)

$\chi$  と  $\gamma$  の対立は、Verner の法則(1)によるものと考えられる。

fairzna

s …… as. fersna, ahd. fers(a)na ( $\bar{o}$ -Stamm und n-Stamm)

z …… got. fairzna

Verner の法則(1)により s と z の対立が生じている可能性もあるが、それと並んで、got. fairzna は、有声子音に挟まれた s がそれらに同化し z へ変化したことによりできた形である可能性もある<sup>60)</sup>。

### 2.1.4. i-語幹

asans

s …… got. asans

z …… ahd. aran (i- oder a-Stamm)

ahd. aran は i-語幹か a-語幹か不明であるが、i-語幹だとしたら s と z の対立は Verner の法則(1)によるもの、a-語幹だとしたら Verner の法則(2)によるものと考えられる<sup>61)</sup>。

drus

s …… got. drus (i- oder a-Stamm)

z …… ae. dryre

got. drus は単数主格と単数与格の例がそれぞれ1例あるのみなので、i-語幹か a-語幹か不明である<sup>62)</sup>。s と z の対立が Verner の法則によるものならば、Verner の法則(1) (got. drus が i-語幹の場合) か Verner の法則(2) (got. drus が a-語幹の場合) のどちらかによるものと考えられるが、ゴート語における s はむしろ got. driusan への類推のよるものである可能性の方が高いように思われる。

(ga-)baurþs

þ …… gabaurþs

ð …… ae. gebyrd, as. giburd, ahd. burt, giburt

ゴート語のみ þ で、他の言語はすべて ð となっているが<sup>63)</sup>、このゴート語の

bについては、Thurneysenの法則によるものと説明されることがある<sup>64)</sup>。しかしながら、名詞的複合語はThurneysenの法則による音変化を示すことは無く、もしgot. gabaurþsのþをThurneysenの法則によるものとするなら、got. gabaurþsを唯一の例外として扱わなければならなくなってくる<sup>65)</sup>。またgot. gabaurþsの場合、þは母音の直後ではなく、間にrがあり、こうした音環境においてもbとþの間で異化が起こり得るのかどうか甚だ疑問である。idg. \*-ti-とidg. \*-tu-は共に動詞派生抽象名詞を形成する接尾辞であるが、本来idg. \*-ti-により形成された語は接尾辞アクセント、idg. \*-tu-により形成された語は語根アクセントであったとされる。しかしながらすでにインド・ヨーロッパ祖語においてこのアクセントの位置の原則に反した例、すなわち\*-ti-という接尾辞を持っていても語根アクセント、\*-tu-という接尾辞を持っていても接尾辞アクセントの例が出現していたものと考えられ<sup>66)</sup>、ゴート語でもgataurþs, gakuþs, gaqumþsはþという子音により語根にアクセントが有ったことを示している(gakuþs, gaqumþsについては下記参照のこと)。よって、gabaurþsについても、Vernerの法則(1)により音の対立が生じている可能性は十分ありうる<sup>67)</sup>。gabaurþsにおける音の対立は、Thurneysenの法則よりも、Vernerの法則(1)による方が無理無く説明できるように思われる。

(ga-)kumþs

b…… got. gakuþs

ð…… [ae. cynd, gecynd, ahd. gikunt] [got. gakuþs]

ゴート語のgakuþsは、L, 3, 23に一回のみἀρχόμενοςの訳語としてuf gakuþpaiという形で出てくるが、この訳は非常に不可解であり、これが誤訳なのかそうでないのか、gakuþsはどのような意味かなど見解の分かれるところである。もしgot. gakuþsとgot. gakuþsがgakunnanから派生した同一の語の別形だとしたら、ゴート語内部にþを持つ形とðを持つ形が並存していることになる。この場合のþとðの対立はVernerの法則(1)あるいはVernerの法則(4)によるものと考えられる<sup>68)</sup>。それに対し、もしgot. gakuþsがidg. \*gen-を持つものだとしたら、ae. cynd, gecyndやahd. gikuntとの関係が考えられるが、この場合は、古英語にge-が無くまたðを持つcyndという語形が存在していることから、Vernerの法則(1)によりþとðの対立が生じている可能性以外考えにくいだろう。

(ga-)qumþs

b…… got. gaqumþs

ð…… aisl. samkund

gaqumþs は上の gabaurþs, gakuþs 同様、idg. \*-ti- を持つ語である。古高ドイツ語では kumft が独立語として用いられているが、ゴート語と古アイスランド語ではそれぞれ gaqumþs, samkund という複合語しか伝わっていない。þ と ð の対立の原因としては Verner の法則 (1) と並んで、もし古アイスランド語において þ を持った独立語が存在していたとしたら (この可能性は極めて低いかもしれないが) Verner の法則 (3)、もしゴート語でも古アイスランド語でも \*qumþ, \*kund は決して独立語として用いられることが無かったとしたら Verner の法則 (4) の可能性も考えられよう。

なお、ahd. kumft が有声摩擦音を示している例としてあげられることがあるが<sup>69)</sup>、ahd. kumft の語末の t は ð が変化したものではなく、idg. t がそのまま保持されたものと考えるべきであろう (mt > mpt > mft)<sup>70)</sup>。

haurds

þ…… as. hurth, ahd. hurd

ð…… got. haurds, ae. hyrd

nauþs

þ…… got. nauþs

ð…… ae. nīed, as. nōd, ahd. nōt

haurds と nauþs における þ と ð の対立は、Verner の法則 (1) によるものと考えられる。nauþs はゴート語でのみ þ が現れているが、そのゴート語でも nauþs が複合語の第 1 成分として用いられる場合には、常に naudi- という形になる。この got. nauþs と got. naudi- の対立は Verner の法則 (1) か、あるいは got. naudi- を持つ複合語は、全てとは言わないまでも、第 2 成分の方にアクセントを持つものがあつたためかのいずれかの理由によるものであろう。

slahs

s…… got. slahs

z…… aisl. slagr, ae. slege, as. slegi, ahd. slag

Verner の法則 (1) により s と z の対立が生じているということも考えられるが、s を示しているのがゴート語のみであることからすると、ゴート語の s は slahan に対する類推によるものである可能性が高いと言える。

þlauhs

χ…… got. þlauhs (i- oder a-Stamm)

γ…… aisl. flugr, ae. flyge

got. *plauhs* は単数主格の例が1例あるのみなので、i-語幹か a-語幹かはつきりしていない<sup>7)</sup>。p と θ の対立は Verner の法則 (1) (got. *plauhs* が i-語幹の場合)、あるいは Verner の法則 (2) (got. *plauhs* が a-語幹の場合) による可能性もあるが、ゴート語における χ は got. *pliuhan* への類推によるものである可能性の方が高いように思われる。

#### 2.1.5. u-語幹

*hūhrus*

χ …… got. *hūhrus*

γ …… aisl. *hungr* (a-Stamm < u-Stamm), ae. *hungor* (a-Stamm < u-Stamm), as. *hungar* (a-Stamm < u-Stamm), ahd. *hungar* (a-Stamm < u-Stamm)

*qīpus*

þ …… got. *qīpus*, ae. *cwīp* (a-Stamm < u-Stamm)

θ …… ahd. *qiti* (i-Stamm < u-Stamm)

*hūhrus* 及び *qīpus* における無声摩擦音と有声摩擦音の対立は Verner の法則 (1) によるものと考えられる。

#### 2.1.6. n-語幹

*auso*

s …… got. *auso*

z …… aisl. *eyra*, ae. *ēare*, as. *ōra*, ahd. *ōra*

s と z の対立は Verner の法則 (1) によるものではないかと思われるが、そのほかに、*auso* は二次的な派生語で、ゴート語の s は元となった(語根)名詞への類推によるものではないかと説明されることがある<sup>7)</sup>。しかしながらその元となるべき名詞の存在自体一つの仮定に過ぎず、ゴート語の s が類推によるものかどうかは何とも言い難い。

*frumadei*

þ …… mhd. *frumede*

θ …… got. *frumadei*

þ と θ の対立は、Verner の法則 (1) によるものと考えられる。なお、got. *frumadei* では、第 2 音節の a を挟む m と d の間で異化現象は起こっていない。

ufjo

f…… got. ufjo (ōn- oder an- oder ja/jō-Stamm)

þ…… ahd. uppa (ōn-Stamm), uppi (ja-Stamm), uppig (Adj.)

ufjo は女性弱変化名詞か中性弱変化名詞かあるいは文献で実証されていない形容詞 \*ufjis に対する副詞形か不明である。ufjo における f と þ の対立は Verner の法則(1)もしくは Verner の法則(2)によるものと考えられる。

## 2.2. 形容詞

形容詞については、まず原級を各形態論上の下位クラスに分けて見ていった後、比較級、最上級を扱うことにする。

### 2.2.1. a-/ō-語幹

ainaha

χ…… got. ainaha

γ…… aisl. einga, ae. ānga, as. ēnag, ahd. einag

これは接尾辞 \*-aχa- と \*-aγa- の対立であるが、これについては2つの説がある。1つは Verner の法則(1)によるとするもの<sup>73)</sup>、もう1つは Thurneysen の法則によるものとするものであるが<sup>74)</sup>、恐らく後者により対立が生じているものと思われる。

\*-aχ / γa- が各言語でどちらの形で出てくるかをこの接尾辞を持つ全ての形容詞について見てみると、\*-aχa- が用いられているのはゴート語のみで、他の言語では常に \*-aγa- が用いられていることが分かる。そしてそのゴート語において \*-aχa- の用いられる音環境を調べてみると、\*-aχa- の前の子音は常に有声音で<sup>75)</sup>、無声音の例は1つも無い<sup>76)</sup>。このことはゴート語で見られる -ahs は、その前にある子音との間で異化が起こり形作られたものであることを有力に物語っていると言える。

\*-aχa- と \*-aγa- の対立で \*-aχa- を持つ語の例として ahd. steinahi などの \*-aχja- という接尾辞を持つ ja-語幹の名詞があげられることがある<sup>77)</sup>。確かに \*-aχja- という接尾辞は元は \*-aχa- が \*-ja- により拡張されたものだが、\*-aχja- による造語は \*-aχ / γa- を持つ形容詞の存在を前提としておらず<sup>78)</sup>、またたとえまたま \*-aχ / γa- を持つ形容詞が存在していたとしても、\*-aχja- はその形容詞が \*-aχa- を持つにせよ \*-aγa- を持つにせよ<sup>79)</sup>、ahd. steinag:steinahi の例も示しているように、常に \*-aχja- という形で用いられ、\*-aγja- となる

ことは決して無い。こうしたことから \*-aχja- は \*-aχ / γa- とは別扱いすべきであり、\*-aχa- という形の接尾辞を持つのはやはりゴート語のみとするべきであろう。

daups

þ …… got. dauþs

ð …… ae. dēad, as. dōd, ahd. tōt

þ と ð の対立は Verner の法則 (1) によるという可能性もあるが、\*dauða- が本来の形で、ゴート語の þ は dauþus への類推によるものである可能性もある<sup>80)</sup>。

-falps

þ …… got. -falps

ð …… aisl. -faldr, ae. -feald, -fald, as. -fald, ahd. -falt

ganohs

χ …… got. ganohs

γ …… aisl. gnógr, ae. genōg, as. ginōg, ahd. ginuog

-falps は常に複合語の第 2 成分としてしか用いられず、また ganohs も常にこの形で用いられ、\*nohs が単独で現れることは無い。無声摩擦音と有声摩擦音の対立については、Verner の法則 (1) もしくは Verner の法則 (4)<sup>81)</sup> ということも考えられるが、無声摩擦音を示しているのがゴート語のみであることからすると、got. -falps は got. falpan に対する、got. ganohs は got. ganauhan に対する類推による形である可能性がかなり高いといえよう<sup>82)</sup>。

hauhs

χ …… got. hauhs, aisl. hár, ae. hēah, as. hōh, ahd. hōh, agutn. haur  
(nom. sg. m.), hau (f.), haut (n.), adän. hōt (nom. sg. n.)

γ …… agutn. hauga (akk. sg. f.), aschwed. högher, adän. hōgh

χ と γ の対立は Verner の法則 (1) によるものと考えられる。古ゴットランド語と古デンマーク語では χ を持つ形と γ を持つ形の両方が見られる<sup>83)</sup>。

-kunds

þ …… aisl. -kunnr

ð …… got. -kunds, aisl. -kundr, ae. -cund

-kunds は常に複合語の第 2 成分としてしか用いられない。þ と ð の対立は、Verner の法則 (1) もしくは Verner の法則 (4) によるものであろう。古アイスランド語では、þ を持つ形と ð を持つ形の両方が並存している。

raþs

þ …… got. raþizo, ae. ræþ, ahd. rado (Adv.)

ð …… ae. ræd

raþs はゴート語には raþizo という比較級の形でしか出てこないが、古英語と古高ドイツ語でも þ が現れていることから、ゴート語における þ は比較級であるために無声摩擦音になっているのではなく、これは原級においても þ であり、それがそのまま比較級にも現れているものと考えられ、よって raþs は比較級の所ではなくここで扱うことにした。この raþs では þ を持つ形と ð を持つ形の両方が見られるが、これは Verner の法則(1)によるものと考えられる<sup>84)</sup>。なお、古英語には þ を持つ形と ð を持つ形の両方が生じている。

stainahs

χ …… got. stainahs

γ …… ae. stāneg, stānig, mnd. stēnich, ahd. steinag

ainaha と同じ \*aχa-と \*aγa-の対立である。ainaha を参照のこと。

-wairþs

þ …… got. -wairþs

ð …… as. -werd, ahd. -wert

-wairþs は独立語として用いられることは無く、常に複合語の第2成分としてのみ用いられる。þ と ð の両方が見られることについては、Verner の法則(1)もしくは Verner の法則(4)<sup>85)</sup>が原因として考えられよう。þ を示すのがゴート語のみなので、got. -wairþs は got. wairþan への類推による形であるということも考えられなくもないが、その場合は意味的なずれが問題となってしまう<sup>86)</sup>。

#### 2.2.2. ja-/jō-語幹もしくは i-語幹

\*framapeis (ja-/jō-Stamm) oder \*framaps (i-Stamm)

þ …… got. framapeis oder framaps, ae. frem(e)þe (ja-/jō-Stamm),  
as. fremithi (ja-/jō-Stamm), ahd. fremadi, fremidi (ja-/jō-Stamm)

ð …… ae. frem(e)de

\*sleideis (ja-/jō-Stamm) oder \*sleips (i-Stamm)

þ …… ae. slīþe (ja-/jō-Stamm), as. slīthi (ja-/jō-Stamm),  
ahd. slidīg

ð…… got. sleideis oder sleibs

ゴート語はどちらの語も他の言語のように ja-/jō- 語幹なのかそれとも i- 語幹なのか不明であるが、もし ja-/jō- 語幹だとしたら、p と ð の対立は Verner の法則(1)によるものと考えられる。それに対し i- 語幹だとしたら、Verner の法則(2)によるということも考えられよう。

### 2.2.3. u-語幹

þaursus

s …… got. þaursus

z …… aisl. þurr (a-/ō-Stamm < u-Stamm), ae. pyrre (ja-/jō-Stamm < u-Stamm), as. thurri (ja-/jō-Stamm < u-Stamm), ahd. durri (ja-/jō-Stamm < u-Stamm)

þaursus での s と z の対立については、Verner の法則(1)によるということも考えられるが、ゴート語において gabairsan, þaursjan に対する類推から \*þaurzus が þaursus に変化し、s と z の対立を生じるようになったのではないかということも考えられる<sup>87)</sup>。

### 2.2.4. 比較級、最上級

jūhiza

χ …… got. jūhiza, aisl. øre

γ …… aisl. yngre, ae. geongra, as. jungaro, jūgro, ahd. jungiro, jūgiro

比較級は本来語根アクセントであり<sup>88)</sup>、χ を持つ got. jūhiza, aisl. øre はより古い形で、γ を持つ aisl. yngre, ae. geongra, as. jungaro, ahd. jungiro は体系強制により形成された新しい形、as. jūgro と ahd. jūgiro は χ を伴った古い比較級が原級もしくは体系強制により形成された新しい比較級への類推により χ を γ に変えたものとみなすことができる<sup>89)</sup>。

wairsiza

s …… got. wairsiza, ae. wiersa, as. wirsa, ahd. wirsiro

z …… aisl. werri

比較級においては、ゴート語、古英語、古ザクセン語、古高ドイツ語では語根にアクセントがあったことから当然予測される s が現れているが、古アイスランド語では z になっている。最上級は、古高ドイツ語が s で古英語が z、古



ザクセン語では s を持つ形と z を持つ形が並存している。ゴート語の語形は伝わっていない。

s …… ahd. wirsisto, as. wirsista

z …… ae. wierrest, as. wirrista

最上級は本来語末アクセントだったのではないかとされているが<sup>90)</sup>、もしそうだったとすると、z を持った形が本来の形ということになり、また aisl. verri は最上級に対する類推、ahd. wirsisto, as. wirsista は比較級に対する類推によってできた形と考えることができるだろう。古アイスランド語では比較級、最上級共に z を持つ形となっているが、起動態動詞では s が現れている (versna)。これは古い比較級の子音を伝えているのかもしれない。副詞の比較級は、古英語、古ザクセン語、古高ドイツ語、古アイスランド語共に、形容詞の比較級と同一の子音となっている。

s …… ae. wiers, as. wirs, ahd. wirs

z …… aisl. verr

これからするとゴート語の wairs も、形容詞の方が wairsiza なので、語末の s は germ. s で、germ. z が無声化したものではないと考えてよいであろう。

### 2.3. 数詞

ainlif, twalif

f …… ahd. einlif, zwelif

þ …… got. ainlif, twalif

ainlif, twalif における f と þ の対立は、Verner の法則 (1) もしくは Verner の法則 (4) によるものであろう。

fidur-

þ …… ae. fiber-

ð …… got. fidur-

fidur- は便宜上数詞に分類して扱うことにする。古英語で þ、ゴート語で ð になっているのは、Verner の法則 (1) もしくは Verner の法則 (4) によるか、あるいは þ を持つ形が本来の形だったのが、ゴート語において fidwor への類推から þ が ð に変化したためであろう。

### 3. その他

afar

f…… got. afar, ahd. afur, afar

þ…… aisl. aur- (<\*abur-), ahd. abur

got. afar は前置詞、副詞、複合語の第1成分として、ahd. afur, afar, abur は副詞、前置詞、複合語の第1成分として、aisl. aur- は aurborþ などの複合語の第1成分として用いられる。古高ドイツ語では f と þ の両方が見られる。f を持つ形と þ を持つ形が生じている原因は、afar が単独の語として用いられた場合には文中において、造語要素として用いられた場合には語中においてアクセントを失うことが有り、その際 Verner の法則が働いたものと考えられる<sup>31)</sup>。

ufar

f…… got. ufar

þ…… ahd. ubar, ubir, ubari, ubiri

got. ufar は前置詞、複合語の第1成分として、ahd. ubar, ubir は副詞、前置詞、複合語の第1成分として用いられる。ufar における f と þ の対立も afar の場合と同様の理由で生じているものと考えられる。

## 註

29) 「ゲルマン諸言語の対応語間に見られる無声摩擦音と有声摩擦音の対立について(1)」は「山口大学文学会志」第46巻(1995)、88～102頁に発表された。

30) インド・ヨーロッパ祖語のアクセントについては、研究は進められているもののまだ不明な点が多い。ましてや、その後どのような変化を経、ゲルマン祖語で Verner の法則による無声摩擦音の有声化が起こっていた頃どのようなアクセント体系が存在し、それぞれの語が語形変化の際どのようなアクセントを示したかについてはなおさらである。またここで Verner の法則(1)としてまとめた2つのケースも、実際のところ、それにより文法的交替が生じていると想定することのできる理由を、他のインド・ヨーロッパ語のアクセントの状態を踏まえつつあげたものに過ぎず、Verner の法則による音変化が起こっていた時点で本当のこの2つのケースが両方とも見られたかどうかは分からない。もし本当に両方のケースが存在していたとした場合、第2のケースが生じた原因の一つとして、名詞の種類によりアクセントの位置が異なっていたのだが、次第にその区別が不明瞭になり、同じ語であっても言

語によりアクセントの位置が異なることとなったためということが想定できよう。また語形変化系列内でアクセントの移動する語の内の少なくとも一部は早くにアクセントの移動を平均化してしまい、その際語によっては言語により平均化の仕方が異なり、そのため第2のケースが生じているということもあるかもしれない。

- 31) ここで言う接尾辞とは対応語（とされる）語の語幹を形成するための接尾辞であり、対応語から更に派生語を形成するための接尾辞のことではない。
- 32) 本稿では接頭辞添加による造語も複合語に含めて扱っている。
- 33) 本稿で扱う語の中には無いが、たとえば ahd. sahs : ahd. mezzirahs のように第2成分の初めの子音に変化していることもある。
- 34) 独立語と同じ無声摩擦音を示しているのは、次の Verner の法則(4)のケースにおいて無声摩擦音が現れているのと同様の理由による可能性も考えられよう。
- 35) ahd. mezzirahs についても、古高ドイツ語には ahd. mezzisahs という語形も存在しており、また古英語の対応語も ae. meteseax である。
- 36) a-語幹名詞の多くは子音幹名詞からの派生語とされており（Hirt, II (1932), S.38及び Bammesberger (1990), S.33を参照のこと）、そのためa-語幹名詞が言語間で示す無声摩擦音と有声摩擦音の対立は元の子音幹名詞への類推によるものである可能性も考えられなくはないが、音の対立を示しているa-語幹名詞が本当に子音幹名詞からの派生語か必ずしもはっきりしているわけではなく、またその子音幹名詞が Verner の法則が作用していた時期にまだ存在していたかどうか不明である。
- 37) 古アイスランド語、古英語、古高ドイツ語には f を持つ aisl. ofn, ae. ofen, ahd. ofan という語が存在しているが、これらと auhns が語源的に言って同一の語なのかどうかは不明である。
- 38) Noreen (1880), S.435f.を参照のこと。
- 39) Braune (198119), S.72f.を参照のこと。
- 40)  $\overline{g}ps$  は  $g\overline{p}s$  と読むという説もあるが、この場合には  $p$  が germ.  $p$  に由来するのか germ.  $\overline{p}$  に由来するのか特定することができない。
- 41) aschwed. kar は R-ウムラウトが起こっていないが、これは adän. diür, aschwed. diür と同様の理由によるものと考えられる。Noreen (1880), S.435を参照のこと。
- 42) liupareis は liuþon からの派生語とも考えられる。

- 43) 強変化動詞とそこから派生した弱変化第2類の動詞とでは、wisan:wizonが文法的交替を示している。なお awiliuþ からも弱変化第2類の動詞 awiliudon が派生しており、そのため liuþon と同じ弱変化第2類同士で文法的交替を示すことになっている。
- 44) Kluge, KZ, NF 6, S.82ff.を参照のこと。
- 45) got. munþs のみ a-語幹か i-語幹か不明であるが(単数形しか伝わっていない)、この唯一語幹形成母音の不明な got. munþs のみが他の言語の語と子音の対立を示しているわけではないので、þ と ð の対立の原因を考察する際、got. munþs の語幹形成母音が a なのか i なのかといったことは問題にする必要は無かろう。なお got. munþs は普通 a-語幹とみなされている。
- 46) got. þeihs “Zeit” – aisl. þing, ae. þing, as. thing,  
ahd. ding “Versammlung, Ding”
- 47) Kluge, Wb.のDingの項、Lehmann, Dictionary の þeihs の項を参照のこと。
- 48) got. þeihs は χ と s の間の母音が長音節の後で脱落してできたという考え方は音韻法則的に正当なものである。しかしながら、got. þeihs, aisl. ax のように語根に -sa- (-es/-osの消失階梯+語幹形成母音-a-) という接尾辞が付加されたもので、祖形は \*þenχaz ではなく、元から \*þenχsa- であった可能性もある。
- 49) たとえば Krahe/Meid (1967), S.144やFalk/Torp (1979<sup>5</sup>) の vitðþa (-da) の項等。
- 50) Krahe/Meid (1967), S.144では ahd. zimbrid, ahd. ferid も過去分詞に由来するとされているが、そうするとここでも d < t が現れているという問題が生じてくる。-id/t < \*ip/ða- は弱変化第1類の動詞からの派生語のみに見られるわけではないことからしても(たとえば ahd. birid < ahd. bēran, ahd. tugide < ahd. tujan) ahd. zimbrid と ahd. ferid は過去分詞とは別の造語と考えた方がよかろう。
- 51) 古高ドイツ語では -ōd と -ōt の内、-ōd の方が多数を占め、-ōt は少数である。
- 52) Krahe/Meid (1967), S.149. なお Bammesberger (1990), S.84では got. aweþi, ae. ēow(e)de, ahd. ouwiti は \*-þ / dja- という接尾辞を持つものとされ、\*awi-dja と分析されている。この分析の妥当性はともかくとして、いずれにせよ got. aweþi における e という母音が問題になってくる。

- 53) こうした説を唱えている文献として、Lehmann, Dictionary (Feist, Wb.) の *awepi* の項では Bremer, PBB 11, S.32が、Braune (1981<sup>19</sup>), S.27ではそれに加え Th. v. Grienberger, Untersuchungen zur gotischen Wortkunde (1990), S.39があげられている。また Krahe/Meid (1967) の上掲箇所でもこうした説明になっている。
- 54) 長い *i* は mhd. *geswistrīde*, mhd. *vingerīde* 等においても見ることがができる。Wilmanns, II (1930), S.350を参照のこと。
- 55) Krahe/Meid (1967), S.150では、長い *i* は接尾辞の前での母音の延長によると説明されている (lat. *crīnī-tus* : *crīni-s*)。しかしながら、逆になぜそれと並んで短い *i* も存在しており、そしてむしろそれが普通なのかについては何も触れられていない。
- 56) もし got. *awepi* という綴りが正しく、第2音節の母音は *e* であり、しかもこの語が \**iþ* / *Øja*-を持つものなのだとしたら、*e* は  $\bar{e}_2 < \bar{e}_i$  とでも考えるべきなのであろうか。
- 57) Lehmann, Dictionary の *awepi* の項では、“-*b*- in Go by Thurneysen’s law” となっている。
- 58) J. de Vries も同様に2通りの可能性を考えている。Vries, Wörterbuch (1977<sup>2</sup>) の *fylgsni* の項を参照のこと。
- 59) Kluge (1881), S.94を参照のこと。
- 60) Lehmann, Dictionary の *fairzna* の項を参照のこと。
- 61) 古フリジア語、古ザクセン語、古アイスランド語、古高ドイツ語にはそれぞれ、*s/z* と *n* の間に -*a*- の無い afries. *esna* ( $\bar{o}$ -語幹)、as. *asna* ( $\bar{o}$ -語幹)、aisl. *qnn* (*u*-語幹)、ahd. *arn* (*i*-語幹) という語が存在している。この場合 *s* を持つ語は  $\bar{o}$ -語幹、*z* を持つ語は  $\bar{o}$ -語幹でないので、*s* と *z* の対立は Verner の法則(2)によるものと考えられる。また行為者名詞を形成する \**ja*-を伴った got. *asneis*, ae. *esne*, ahd. *asni* はどれも *s* を示しており、またその *s* と *n* の間に母音を持たない。
- 62) got. *drus* は普通 *i*-語幹に分類されている。
- 63) 英語の *birth* はおそらく古ノルド語からの借用語であり (aisl. *byrþr*)、よって *þ* を持った例とはみなせない。
- 64) Lehmann, Dictionary (Feist, Wb.) の *gabaurþs* の項及び Mossé (1969<sup>2</sup>), p.68を参照のこと。
- 65) Mossé は上掲箇所におき *gabaups* を唯一の例外と明言し、ゴート語の *p*

をThurneysenの法則によるものとしている(“Cette dissimilation n’affecte pas les composés nominaux, à l’exception de *ga-baurþs*.”)。

66) Krahe/Meid (1967), S.151を参照のこと。

67) 古インド語の *bhṛtiḥ* のアクセントの位置は、*bhṛtiḥ* と *bhṛtiḥ* の2通りがある。

68) もし got. *gakunþs* と got. *gakunds* が同一の語で、この文法的交替が Vernerの法則(4)によるものだとしたら、この2つの語形の存在は、同一言語内にアクセントの位置の異なる別形が存在していたためか、あるいは第2成分が副アクセントを持ち、そのため Verner の法則が働くかどうかにか揺れが生じ、*p* を持つ形と *þ* を持つ形の両方を生じたが、その後子音がどちらかに統一されることなくそのまま残ったためと説明できよう。

69) Barber (1932) の *kwumpi* : *kwumþi* の項 (S.31) を参照のこと。

70) Brugmann/Delbrück, 1/1 (1930<sup>2</sup>(1967)), S.386では、*-mþ->-mfþ* という変化を仮定しているが、もしそうだとしたら *-f-* も Verner の法則による音変化を受けたはずであり、*-mfþ-* は *-mþþ-* になり、更に *-mþþ->-mbd->-mbt->-mpt-* と変化したはずで、*ahd. kumft* という語形の説明がつかなくなる。

71) got. *plauhs* は普通 *i* 語幹に分類されている。

72) Kuryłowicz (1968), S.25及び Bammesberger (1990) の *\*auz-an-* の項 (S.174) を参照のこと。

73) Brugmann/Delbrück, 2/1 (1906<sup>2</sup>(1967)), S.493 を参照のこと。また Barber (1932) は Verner の法則からゲルマン祖語においてアクセントが第1音節に固定される前の名詞と形容詞のアクセントの位置を知ろうとするものであるが、ここでも *\*-aχ / γa-* が Verner の法則による音変化を示している例として取り上げられている (S.133)。

74) Braune (1981<sup>19</sup>), S.64f. を参照のこと。

75) ゴート語で *-ahs* の方を持つ語は次の通りである。

*ainaha, stainahs, unbarnahs, wainahs* (?), *waurdahs, broþrahans*  
(Substantiv, m., pl.)

このほか *aurahjom* (dat. sg.), *bairgahei* が派生する元になっているはずの形容詞 *\*aurahs*, *\*bairgahs* もこれに加えることができよう。

76) もう一方の *-ags* の前の子音については、*wulþags* が無声音を示しており、そのほかの語は有声音となっている (*audags, gredags, manags, modags,*

unhunslags)。

77) たとえば Barber (1932) の -aχa- : -aγa- の項 (S.133)。

78) たとえば ahd. aganahi, eihhahi, gifesahi, rōrahi, wīdahi 等。

79) 実際には \*-aχa- の方の例は存在しない。

80) Barber (1932) の θauþa : θauθa の項 (S.130) でも (Verner の法則と並んで) daupus への類推の可能性が指摘されている。Heidermanns (1993) の -dauda- の項 (S.149) ではゴート語の þ は got. daupus への類推によるものとされている。

81) F. Kluge も -falþs が þ と θ の両方を示すことについて、複合語によりアクセントの位置が違っていたためであるかもしれないとしている。Kluge, KZ, NF 6, S.84 を参照のこと。

82) 「ゲルマン諸言語の対応語間に見られる無声摩擦音と有声摩擦音の対立について(1)」の註1)にも記した通り、got. ganah の不定詞は普通 \*ganauhan とされている。なお Heidermanns (1993) の -falda- の項 (S.187) では、got. -falþs はおそらく got. falþan に対する類推によるもの、-nōga- の項 (S.428 f.) でも got. ganohs は ganah に対する類推によるものとされている。

83) a-語幹名詞の aisl. haugr と ahd. houg もここに含めるとするならば、古アイスランド語と古高ドイツ語でも同一言語内で文法的交替が見られるということになる。

84) 語頭に h を持つ ae. hræþ, hræd, ahd. hrado (Adv.) と raps の語源的関係については説の分かれるところであるが、ae. hræþ, hræd, ahd. hrado も Verner の法則(1)によると考えられる文法的交替を示しており、そしてこれもまた raps と同様に、古英語では þ を持った形と θ を持った形の両方が見られる。

85) got. -wairþs に and(a)- を付けると、andwairþs となり、\*andawairþs とはならない。このことは got. andwairþs は第2成分の -wairþs の方にアクセントがあったことを物語っている。Kluge, KZ, NF 6, S.81 及び S.84 を参照のこと。

86) Heidermanns (1993) の -werda- の項 (S.672f.) では、got. -wairþs は got. wairþan に対する類推によるものとされている。

87) Heidermanns (1993) の þurzu- の項 (S.632f.) でもゴート語の語形は類推によるものと説明されている。

88) Hirt, II (1932), S.102 や Streitberg (1974<sup>4</sup>), S.214 を参照のこと。

- 89) 古い語根アクセントの名残はこの got. jūhiza, aisl. óre と次の got. wairsiza, ae. wiersa, as. wirsa, ahd. wirsiro のほか aisl. ellri, ahd. aldiron において見ることができる。
- 90) Hirt, II (1932) 上掲箇所を参照のこと。
- 91) Braune (1975<sup>13</sup>), S.129f.を参照のこと。

#### Abkürzungen

adän. = altdänisch	germ. = germanisch
Adj. = Adjektiv	got. = gotisch
Adv. = Adverb	gr. = griechisch
ae. = altenglisch	idg. = indogermanisch
afries. = altfriesisch	lat. = lateinisch
agutn. = altgutnisch	m. = Maskulinum
ahd. = althochdeutsch	mhd. = mittelhochdeutsch
aind. = altindisch	mnd. = mittelniederdeutsch
aisl. = altisländisch	mndl. = mittelniederländisch
akk. = Akkusativ	n. = Neutrum
anorw. = altnorwegisch	ndl. = Niederländisch
as. = altsächsisch	nom. = Nominativ
aschwed. = altschwedisch	pl. = Plural
dat. = Dativ	Prät. = Präteritum
f. = Femininum	sg. = Singular

#### Literaturverzeichnis

- Bammesberger, Alfred: Der Aufbau des germanischen Verbalsystems. Heidelberg 1986.
- Idem: Die Morphologie des urgermanischen Nomens. Heidelberg 1990.
- Barber, Charles Clyde: Die vorgeschichtliche Betonung der germanischen Substantiva und Adjektiva. Heidelberg 1932.



- Braune, Wilhelm: Althochdeutsche Grammatik. 13. Auflage. Bearbeitet von Hans Eggers. Tübingen 1975.
- Idem: Gotische Grammatik. 19. Auflage. Neu bearbeitet von Ernst A. Ebbinghaus. Tübingen 1981.
- Brugmann, Karl/Delbrück, Berthold: Grundriß der vergleichenden Grammatik der indogermanischen Sprachen. 1. Band. 2. Bearbeitung. Unveränderter Neudruck. Berlin/Leipzig 1930. (Unveränderter photomechanischer Nachdruck. Berlin 1967.)
- Eidem: Grundriß der vergleichenden Grammatik der indogermanischen Sprachen. 2. Band. 1. Teil. 2. Bearbeitung. Straßburg 1906. (Unveränderter photomechanischer Nachdruck. Berlin 1967.)
- Eidem: Grundriß der vergleichenden Grammatik der indogermanischen Sprachen. 2. Band. 3. Teil. 1. Hälfte. 2. Bearbeitung. Straßburg 1916. (Unveränderter photomechanischer Nachdruck. Berlin 1967.)
- Brunner, Karl: Altenglische Grammatik. 3., neubearbeitete Auflage. Tübingen 1965.
- Collinge, N.E.: The laws of Indo-European. Amsterdam/Philadelphia 1985.
- Falk, Hjalmar/Torp, Alf: Wortschatz der germanischen Spracheinheit. 5., unveränderte Auflage. Göttingen 1979.
- Feist, Sigmund: Vergleichendes Wörterbuch der gotischen Sprache. 3. neubearbeitete und vermehrte Auflage. Leiden 1939.
- Gallée, Johan Hendrik: Altsächsische Grammatik. 3. Auflage. Tübingen 1993.
- Heidermanns, Frank: Etymologisches Wörterbuch der germanischen Primäradjektive. Berlin/New York 1993.
- Hirt, Hermann: Handbuch des Urgermanischen. II. Teil. Heidelberg 1932.
- Holthausen, F.: Altenglisches etymologisches Wörterbuch. 3., unveränderte Auflage. Heidelberg 1974.
- Idem: Gotisches etymologisches Wörterbuch. Heidelberg 1934.
- Kluge, Friedrich: Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache.

22. Auflage. Völlig neu bearbeitet von Elmar Seebold. Berlin/  
New York 1989.
- Idem: Zur altgermanischen Sprachgeschichte. In: Zeitschrift für  
vergleichende Sprachforschung auf dem Gebiete des Deutschen,  
Griechischen und Lateinischen. Neue Folge. Band. 6.
- Krahe, Hans: Germanische Sprachwissenschaft. I und II. 7. Auflage  
bearbeitet von Wolfgang Meid. Berlin 1969.
- Idem: Historische Laut- und Formenlehre des Gotischen. 2. Auflage  
bearbeitet von Elmar Seebold. Heidelberg 1967.
- Krahe, Hans/Meid, Wolfgang: Germanische Sprachwissenschaft III.  
Wortbildungslehre. Berlin 1967.
- Krause, Wolfgang: Handbuch des Gotischen. 3., neubearbeitete Auflage.  
München 1968.
- Kuryłowicz, Jerzy: Indogermanische Grammatik. Band II. Heidelberg  
1968.
- Lehmann, Winfred P.: A Gothic etymological dictionary. Based on the  
third edition of *Vergleichendes Wörterbuch der gotischen Sprache*  
by Sigmund Feist. Leiden 1986.
- Meillet, Antoine: De l'accentuation de certains verbes en germanique  
commun. In: Mémoires de la société de linguistique de Paris.  
Volume 15. Paris 1908-9.
- Mossé, Fernand: Manuel de la langue Gotique. 2<sup>e</sup> édition. Paris 1969.
- Noreen, Adolf: Altnordische Grammatik I. 5., unveränderte Auflage.  
Tübingen 1970.
- Idem: Weiteres zum Vernerschen Gesetze. In: Beiträge zur Geschichte  
der deutschen Sprache und Litaratur. Bd 7. Halle 1880.
- Onions, C.T. (ed.): The Oxford dictionary of English etymology.  
Oxford 1966 (Reprint: 1985).
- Pokorny, Julius: Indogermanisches etymologisches Wörterbuch. 2 Bde.  
Bern/München 1959/1969.
- Skeat, Walter W. et al.: An etymological dictionary of the English  
Language. 4th edition. Oxford 1909 (Impression of 1985).
- Streitberg, Wilhelm: Die gotische Bibel. 1. Teil. 5. Auflage; 2.

- Teil. 4. Auflage. Heidelberg 1965.
- Idem: Urgermanische Grammatik. 4., unveränderte Auflage. Heidelberg 1974.
- Vries, Jan de: Altnordisches etymologisches Wörterbuch. 2. verbesserte Auflage. Leiden 1977.
- Idem: Nederlands etymologisch woordenboek. Leiden 1987.
- Wilmanns, W.: Deutsche Grammatik. 2. Abteilung. 2. Auflage. Unveränderter Neudruck. Berlin/Leipzig 1930.
- Wright, Joseph: Grammar of the Gothic language. 2nd edition. Oxford 1954 (Reprint: 1981).

